

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2022～2023

課題番号：22K18629

研究課題名（和文）リアルとサイバーを越境する研究、教育、学生：デジタルネイティブ時代の大学

研究課題名（英文）Research, education, and students crossing the real and cyber world

研究代表者

小林 信一（KOBAYASHI, Shinichi）

広島大学・高等教育研究開発センター・特任教授

研究者番号：90186742

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、デジタルネイティブの時代において、リアル世界とサイバー世界が越境する大学像や学問観を問い直すことにある。

ソーシャルメディア（SNS）の影響が大きい。SNSが普及した結果、合理性や真実性が意味を失い、さまざまなものがアテンションで評価されるアテンション・エコノミーが浸透した。大学や学問はSNSの中にも存在している。ただし、大学や学問は、世界的な政治動向とも関連している。2022年以降は移民排斥的な政治動向や社会の分断が顕在化しており、大学や学問にも影響を及ぼしている。その結果、大学批判的な大学像や学問観が顕著になってきた。こうした変化は、数年前までは、予想もできなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

SNSの浸透の結果、非リベラルな右派ポピュリスト政党の勢力拡大といった政治情勢が、政党レベル・国家レベルで高等教育に変容を迫りつつあることを示し、大学問題が世界各国の政治と深く関わっていること、ひいては高等教育研究の視野の拡大が必要であることを示した。

社会としても、大学の社会的意義や学問のあり方について慎重に「介入」、相互交流していく必要があることを示した。ただし、SNSの時代にはアテンションにより、評判が決まる面があるので、アテンション・エコノミーの特性について理解する必要がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to question the image of the university and the academia in the age of digital natives, where the real and cyber worlds cross borders.

Results are as follows. Social media (SNS) has had a significant impact; as a result of the proliferation of SNS, rationality and truthfulness have lost their meaning, and an attention economy in which various things are valued in terms of attention has spread. Universities and academia do not exist on their own, but are also related to global political trends: anti-immigrant political trends and social divisions are becoming more apparent after 2022, affecting universities and academia. As a result, critical views of university and academia have become more pronounced. These changes were unforeseen until a few years ago.

研究分野：科学技術社会論

キーワード：ソーシャルメディア アテンション 大学批判

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者及び分担者は、科学技術政策や高等教育を専門とし、その中で研究者の行動や研究評価・大学評価等について研究してきた。その過程で、ピアレビューを通じた研究内容に関するレピュテーションを中心に置く評価が、2000年前後から論文データベース(DB)などから派生する被引用数等の外形的指標による評価にシフトしてきたことに注目してきた。指標による評価は、多様な研究の存在を無視し、すべてを単純平均した評価になる傾向がある。そのような指標を前提として設計された研究支援プログラム(ファンディング・システム)は、一見したところ公平性があるように見えるが、多様性を無視したものになりがちである。リアリティを無視した施策が出現する上で、サイバー世界(ネット空間、ネット世界)の果たしている役割が見逃せない。

一方、デジタルネイティブ世代が大学の構成員となるに従い、大学関係者(教職員、学生)がSNS上でヘイト発言や差別発言、場合によっては個人攻撃をする等による「炎上」も、複数の大学で発生していることも見逃せない。

さらに、2020年以降のコロナ禍でリモート講義が急速に広がり、大学も講義にとどまらず多様なコンテンツのネット空間への情報発信を加速している。しかし、それは世界中の大学や教育関係機関が同様に取り組んでいるのであり、結果的に、個々の大学が存在している意味は何かという、大学の根幹に関わる問題を提起している。

こうした一連の現象は、別々に起きている現象ではなく、学術や大学をめぐって、リアル世界とネット世界が相互に越境する状況が生じており、その中で大学や学術のあり方が揺らいでいると捉えることで、大学、研究、教育、学生等の変容を統一的に議論できるのではないかという仮説に至った。

## 2. 研究の目的

研究者の行動や研究評価・大学評大学はインターネットを教育・研究のツールとして使い始めた。大学のデジタル・トランスフォーメーション(DX)は喫緊の課題である。しかし、現実には予想ではないスピードで前進している。いまやネット世界に独自の学術コミュニティが形成され、専らサイバー世界で活動する研究者が出現し、中にはリアル世界の学術出版に逆進出するだけでなく、大学の教員になる例も現れている。学生はコロナ禍の中でリモート講義を経験した。しかし、ネット世界には、フリーの教育コンテンツが溢れており、学生にとって自大学が提供するコンテンツはその一部でしかなく、大学教育は相対化している。いまやデジタルネイティブ世代が学生や若手教員になる時代である。研究者や大学も否応なくネット世界に取り込まれ、論文DBを活用した研究評価やランキング等のネット世界の動きに左右されている。もはや、リアルな世界でのみでは、大学や学問を理解できない。本研究の目的は、デジタルネイティブ時代において、リアル世界とネット世界を越境する大学像を問い直すことにある。

## 3. 研究の方法

デジタルネイティブ時代において、リアル世界とネット世界が越境する状況下の研究像、教育像、学生像、大学像を問い直す。

研究準備段階以降に、ネット空間の様子は激変した。

第1の変容は、とくにウクライナ戦争の始まり、ソーシャルネットワーク(SNS)の急速な普及と、いわゆるフェイクニュースの生成とSNSのエコーチェンバー効果により、SNS自体の多数の発生と、SNS世界の並立と分断化が進んだ。当初はSNS世界の網羅的なデータ収集を想定していたが、不可能であるだけでなく、その分析枠組の妥当性や正統性も失われた。とくに、眼前の分断化、乱立するネット世界の動向を論述する枠組みがない。そこで、SNS世界の包括的、体系的な分析は行わず、断片的であっても、関連しそうな事例を広範に探索し、事例に包括的分析を加えるという素朴なアプローチを採用することとした。

そこで、本研究はまず、デジタルネイティブ時代の変化の事例を包括的に探索・分析する。ネット世界の活動には未成熟な面や不完全な面、必ずしも望ましくない性質などもあり、それらがリアル世界の研究や大学、学生に及ぼす影響も見逃せない。このような負の側面についても抽出することとした。

なお、コロナ禍という特殊要因により、サイバー世界とリアル世界が越境する事態が加速、顕在化したことから、まずは、急速に変容する学問や大学の実態を、適時かつ速やかに把握することに重点を置き、大学や研究活動に関する課題の抽出を行う。

第2の変容は、ネット空間の大学の在り方は、それ自体が独立に存在しているのではなく、SNSを介して、国際的な政治情勢とも深く関連していることである。世界的な移民排斥的な政治への傾斜が急速に進み、それが各国政府の大学批判的傾向や自国第一主義的トレンドと交錯した。大学だけに焦点を当てても全体像は理解できないのである。そこで、研究対象の範囲を大幅に拡大し、世界の政治動向との関連性にも注目することとした。

#### 4. 研究成果

いまやデジタルネイティブ世代が学生や若手教員になる時代である。研究者や大学も否応なくサイバー世界に取り込まれ、論文データベースに基づく研究評価やランキング等のサイバー世界の動きに左右されている。もはや、リアルな世界のみでは、大学や学問を理解できない。そこで、サイバー世界を利用した研究様式の実態を調査したところ、ソーシャルメディア（SNS）の影響が大きいことがわかった。そこで、SNS と知識生産の関係に焦点を当てることとした。また、知識生産における SNS の意味や位置付けは、大きく、かつ急速に変化しており、最新の動向を論述する枠組みがない。そこで体系的な分析は行わず、事例を探索し、事例の包括的分析を加えるというアプローチを採用した。事例の分析から得られた結論は以下のようなものである。

##### (1) 世界の政治と大学

米国で 2007 年頃にはじまるサブプライム住宅ローン危機、リーマンショックなどの「金融危機」、2015 年頃に始まる「社会の分断」「格差社会」「反知性主義」「ポピュリズム」「大学の否定」「陰謀論やフェイク」のトレンドと密接に関係している。大学がある種の既得権を有する集団に専有されており、それが格差の源泉になっているという見方が拡大し、トランプ大統領などは既得権に守られた大学を敵視するようになっていった。政治が大学を支持せず、敵視するようになった。

嚆矢はトランプ大統領の誕生である。トランプ大統領の誕生以来、政治家による大学への敵対的な態度が広がり、米国では、右派の州知事や州議会により、DEI（多様性・平等・包摂）などの大学の伝統的でリベラルな価値観も攻撃され、さらには変質し、大学内におけるリベラルと非リベラルの対立も捻れ、大学内の言論空間も混乱している。さらに、ほとんどの大学は州の財政によって支えられているため、財政支援の後退もまた、テニユア制度など、学問の自由や大学の自治の基盤を弱体化させる政治介入となった。

このような大学に対する政治家の態度は、米国にとどまらず、幅広く世界各国で見られる。2022 年以降、世界的な経済不況や欧米で移民排斥を主張する右派ポピュリズム政党や政権が優勢となった結果、彼らは大学に対して政治介入し、学問の自由や研究活動の国際化に制限を加えようとしている。

このような傾向は、高等教育分野ではよく知られた University World News の編集・発行者として著名な元ボストンカレッジの Center for International Higher Education の創設者であると二代目の所長によるニュース記事 (Altbach, Philip G. and de Wit, Hans, 2023, "Why so quiet? Opposing politicisation of HE is mandatory," University World News, 30 September 2023. <<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20230926114029814>>) が「大学の政治化 Government politicisation of universities」と命名し、具体例を紹介している。

これらの事例は、右派ポピュリスト政権や、共産主義政権、権威主義政権、半権威主義政権の下で見られるものである。政府が学術界や大学を政府から独立的または政府に対して反対する思考や行動の源とみなし、反体制的な意見を抑圧し、教員、学生、管理者を統制し、何を教え、何を研究するかに口を出しはじめたのである。政治が大学の自治を否定もしくは無視する動きであるが、大学や社会の中から政府の介入に反対する声が強まらなかった。それどころか、反対の声が存在しないケースすらある。

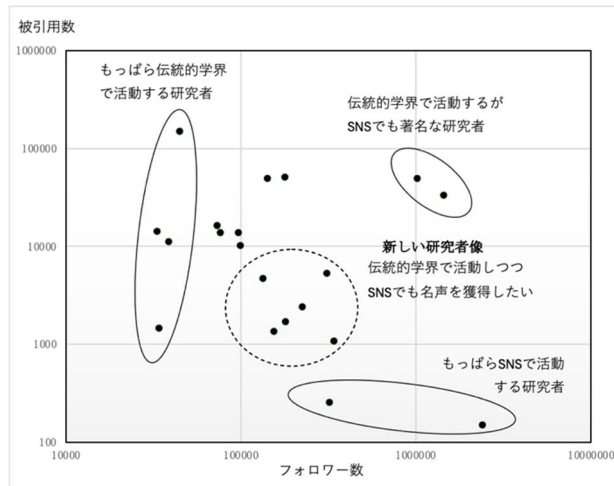
##### (2) SNS 時代の大学

SNS が普及することで、学問の活動がネット空間で展開されるようになった。SNS の特性上、多数の知識世界が併存することになり、しかもリポストなどの機能により、知識の大元の発信者の意図とは関係なく、知識が多様に再生産される。いわゆるフェイクニュース（偽ニュース）のように、SNS の世界では、さまざまな情報が生成されるが、その真偽判定は容易ではなく、相互に対立する情報が並立、対立することも珍しくない。そこにフィルターバブル（ユーザの検索の癖などを反映して、ネットが情報を選択して提供すること）、エコーチェンバー（一定のユーザの範囲内で互いにフォローし合うことで生成される、似た嗜好を持つ情報が流通する集団。結果的に、対立する集団を含め、多数の集団を生成することになる）といったネット空間の特性を通じて、ますます知識世界の多様化、分断、さらには炎上などのカオスを生み出す。そのため、SNS 上の知識世界を網羅的に把握することはできない。そこでは、合理性や真実性が意味を失い、さまざまなものがアテンションで評価されるアテンション・エコノミーが浸透した。

学問世界との関連性では、学問的な様相を呈したポータルサイトが登場する。広範な話題を紹介し、すべての世界の入口かのような印象を与えるが、そこではすべての記事に「スキ」「いいね」の数が表示され、順位づけられており、我々はネットが推奨する情報を消費させられる。本当に価値のある情報は、ロングテールの末端近くにあるかもしれないが、ネットはそのようなことは一切配慮しないし、配慮できない。ネットの知識空間では、本当に必要な情報が、ユーザが求める内容に合致しているかは問われない。あくまでもアテンションにより構築された知識世界であり、あたかも知的な公共空間のように趣向を凝らしてあった

としても、合理性や真実性といったものは意味を持たない。「note」、「言論プラットフォーム・アゴラ」、専門家の見解が読める教養ポータルと銘打つ「SYNODOS」などがある。

研究者の行動も、伝統的な学界活動のみにとどまらず、SNSの世界も活動の場になった。You (You, Jia, 2014, "Who are the science stars of Twitter?," Science, 345(6203), pp.1440-1441, 19 SEP 2014. <DOI:10.1126/science.345.6203.1440>) は Twitter (現 X) におけるフォロワー数の多い研究者の学術論文の被引用数を調べた。このトップ 20 をさらに分析すると図のようなトレンドを描ける。



研究者は、もっぱら伝統的な学界活動をする研究者、その逆にもっぱら SNSの世界で活動する研究者がいる。後者は、SNSのフォロワーは多いが、被引用論文数はほとんどない、つまり学界には適当な居場所がない研究者である。

これらに対して伝統的な学界活動でも相当なレベルのプレゼンスを確保し、SNSとも接点を持っていることで、伝統的学界、SNS世界の双方でプレゼンスを維持している研究者の一群がいる。図中の右上の一群である。

問題は、これらの中間の一群である。伝統的学界でのプレゼンスもそれほど明確でなく、SNSのフォロワーも際立っ

て多いわけでもない。この集団が、過渡的な状態を示すのだとしたら、目指す方向は、右上の伝統的な学界活動でも相当なレベルのプレゼンスを確保し、SNSとも接点を持ち、伝統的学界、SNS世界の双方でプレゼンスを維持している研究者しかない。つまり、今日の研究者の少なからぬ部分は、伝統的学界と SNS世界の双方のトップ研究者を目指しているのである。これが SNS時代の典型的な研究者像となると思われる。

本課題では、上述の内容に関して、一部はすでに学会発表をしているほか、学術誌の論文として取りまとめ、投稿中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 小林信一	4. 巻 (640)
2. 論文標題 大学と有事の科学技術政策	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IDE・現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林信一	4. 巻 92(7)
2. 論文標題 学生の取ったデータは誰のものか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 591-594
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林信一	4. 巻 21
2. 論文標題 科学技術社会論と政策研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 科学技術社会論研究	6. 最初と最後の頁 109-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林信一	4. 巻 23
2. 論文標題 大変革期における大学間統合・連携の可能性と課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 名古屋高等教育研究	6. 最初と最後の頁 9-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林信一	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 研究インテグリティ - 大学と社会のあいだの理解と誤解	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 研究 技術 計画	6. 最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20801/jsrpim.38.1_100	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福本江利子	4. 巻 57
2. 論文標題 「病理としてのレッドテープ」理論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 年報行政研究	6. 最初と最後の頁 124-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11290/jspa.57.0_124	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小林信一
2. 発表標題 当事者の自分事としての「いのち」と研究者としての「知」
3. 学会等名 第3回シンポジウム「命を大切に知る」大阪大学「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林信一
2. 発表標題 繰り返し、伝えること
3. 学会等名 第8回人文・社会科学系研究推進フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福本江利子
2. 発表標題 御用学者の学術的研究に向けての予備的考察
3. 学会等名 関西公共政策研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福本江利子
2. 発表標題 社会のなかの人文科学・社会科学
3. 学会等名 科学技術社会論学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>RRI-LC責任ある研究イノベーション・リエゾンセンター 小林信一関連アーカイブ  <a href="https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/liaison-center/research-innovation/k-archive/">https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/liaison-center/research-innovation/k-archive/</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福本 江利子  (Fukumoto Eriko)  (40835948)	東京大学・大学院総合文化研究科・講師    (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------